

あいまいさを大事に

明日も喋ろう

言葉、届いてますか

2

あいまいさが、大事。
それが、1500人の命
をホスピスで看取ってきた
内科医の、実感だった。
だから今の言論状況は危
ない、徳永進さん(68) 〓
鳥取市〓は感じる。
何が正しいかを一方的に
決める権力も、一つの正義
に固執する集団も。
たとえば、自民党の憲法
草案。「家族は、互いに助
け合わなければならぬ」
とある。
そうだろうか。
身勝手に家族泣かせの男
が危篤に陥り、ホスピスに
担ぎ込まれた。



野の花診療所

徳永さんが2001年に
鳥取市内に開設した19床の
ホスピス。
近隣の人は自宅で最期が

過ごせるよう、診療所から
往診にも出向く。診療所の
風景をつづった著書に「ど
ちらであっても 臨床は反
対言葉の群生地」(岩波書
店)など。



ホスピス「野の花診療所」では、
死の隣に光や笑みがある＝鳥取市

ホスピス医師 徳永進さん(68)

家族は嫌な思いを忘れ、
「生きて」と体をきすった。
が、男が持ち直し暴言を吐
くと、「死ねばよかったの
に」と悪態が口をつく。臨
終間際、また変わる。「生
きて、もう少しだけ」と。
家族は男を愛したのか、
憎んだのか。揺らぐ言葉を
「変節」と非難できるか。
そんな姿を見つめてきた
徳永さんは、「家族は親し
い他人」と理解した方が、
受け止めやすいと考える。
なのに、最高法規で「助け

合う家族像」を押しつけられ、逆に社会にあつれきを
生みかねないと思う。
1960年代末、京大医
学部にいた。「機動隊に殴
られたら痛いから」とデモ
の誘いに尻込みする学生だ
った。「革命なんだ。自分
たちの志は正しい」と言う
同級生らの運動はその後、
内ゲバを経て失速する。

「『正しい』言葉に圧死
した」と感じている。
臨床の現場に、絶対的な
「正しさ」はない。

たとえば、がん告知。
研修医時代、「しない」
のが正しいと教わったが、
その後、欧米流の「する」
が当然になった。だが、患
者の疑心暗鬼を招いたり、
生きる気力を奪ったり。ど
ちらも失敗した。

悩んでいたころ、山陰海
岸の民宿のある女将が、腸
閉塞を起こして運ばれてき
た。進行性胃がんを、関西

の病院で手術したばかり。
医師は告知していないの
に、既にかんを知ってい
た。聞けば、前の手術後、
病院の談話室で夫とこんな
短い会話をしたという。
妻「いけなんだか？」
夫「たんぼのお茶、飲
んどったのになあ」
妻「ほんとかあ」
医師が「告げる」ので
も、家族が「伝える」ので
もなく、何となく「伝わ
りさせない部分も何か味が
あるなあ」と気づいた。

今は、知らないふり、漠
然とした態度で看取りたい
と望む家族に、「やりまし
よう」と応じている。
絶対を疑い、あいまいさ
を大事にする。主義より、
生活感ある言葉を生かす。

「案外、それがちゃん
と、大切なことが『伝わ
る』秘訣かもしれない」
(阿久沢悦子)